12月17日に退院なさったものの、未だSJハウスから外出できない状態のミルワード先生は、現在のご自分の状況についての説明で英詩の会を始められました。事の起こりは、9月21日、イグナチオ教会での昼の英語ミサの途中、1分間ほど気絶なさったことでした。その後、救急車で病院に運ばれ、スキャンを受けたところ、prostate（前立腺）ガンが発見され、入院となりました。病院では、食事が口にあわずにdeath of starvation（餓死）しかけたそうです。今は、SJハウスに戻って、毎日、自由に食べたり、眠ったりなさっています。先日、SJハウスとクルトゥルハイムの間を歩いて「外出」なさり、桜の花が咲く頃には土手まで歩いて桜を見たい－「桜の花が私の回復のシンボルになります」－とのご希望をお持ちです。

ここから、ミルワード先生の講義が始まりました。先生は、英国人なら誰でも持っている2冊の本－Authorized Version of Bible（欽定訳聖書）とCollected Works of Shakespeare（シェイクスピア全集）－を会場にお持ちになり、お話を進められました。

カトリックのイエズス会士であるミルワード先生は、ヘブライ語で書かれたユダヤ人の旧約聖書に由来するプロテスタント聖書であるAuthorized Versionにご不満ではありますが、ご自分の引用にはAuthorized Versionを使われるそうです。その理由は、「引用はなるべく原文に近い方がよい。そうでないと、翻訳ではなく、意訳になってしまう。それは、いい訳ではない」とのことでした。

次に、先生は、シェイクスピアの作品についてお話をされました。シェイクスピアの全集が出版されたのは、シェイクスピアが1616年に亡くなった後の1623年で、Authorized Versionが出版されたのは1611年。共にジェームズ1世王の治世でした。ジェームズ1世は、wisest fool in Christendom（キリスト教国の賢い道化）と呼ばれた国王で、『ハムレット』に出てくるポローニアスを連想させます。一方、シェイクスピアの作品には、『十二夜』のフェステや『リア王』の道化など、foolish wise man（愚かな賢人）が登場します。そして、こうした道化の知恵を見抜くのが、『十二夜』のヴァイオラのようなヒロインたちなのです。「愚か者が実は賢い」という考えは、聖パウロの教えにあり、ヒロインたちの賢さを認めたシェイクスピアは、最初のフェミニストと言うことができるでしょう。また、賢いヒロインたちは、grace（恩寵）に満ちた聖母マリアになぞらえられることがあります。

さらに、先生のお話はシェイクスピアのFirst Folio（第一・二折本）に移りました。First Folioには、Comedies（喜劇）、Tragedies（悲劇）、Histories（歴史劇）に分かれてシェイクスピアの劇が収録されていますが、劇団仲間のジョン・へミングズとヘンリー・コンデルが出版してくれなかったら、これらの作品は消失してしまうところでした。なぜなら、シェイクスピアは同時代の劇作家、ベン・ジョンソンとは異なり、自分の作品の保存に不注意だったからです。一方、シェイクスピアは『ヴィーナスとアドーニス』、『ルークリースの凌辱』、『ソネット集』といった詩の出版には、貴族のパトロンがいたため、十分に注意を払っていました。

そして、先生は『マクベス』についてお話をされました。『マクベス』は校訂上の間違いだらけで、劇としても短すぎ、シェイクスピアはquarto（四折本）では出版したくなかったと思われます。その頃、Act of Parliament against the Use of Divine Name by Players（舞台上で神の名を使用することを禁止する法律）が施行され、『マクベス』以後、1611年までの『アントニーとクレオパトラ』、『コリオレイナス』、『アテネのタイモン』などのローマ史劇では、heaven（天）という単語が、「神」の代わりに用いられました。

そして、いよいよミルワード先生の持論であるCatholic Hypothesis（シェイクスピアは隠れカトリックだったという説）に話は移ります。シェイクスピアの子供時代、エドマンド・キャンピオンやロバート・パーソンズといったイエズス会士がイギリスに渡り、ロンドン塔で拷問を受けた後、処刑されました。ローマ教皇を崇拝し、エリザベス女王をspiritual ruler（宗教上の支配者）と認めない彼らは、イギリスでは反逆者と考えられたのでした。

シェイクスピアの創作期間は主に1590年から1610年の20年間に渡りますが、前半はエリザベス女王の治世、後半はジェームズ1世の治世でした。シェイクスピアは、しばしば劇中でエリザベス女王を批判しています。『十二夜』では、オーシーノ公爵、オリヴィア、ヴァイオラの三角関係が繰り広げられますが、男装したヴァイオラは、オリヴィアに“you are too proud, / But if you were the devil, you are fair”と言います。オリヴィアがエリザベス女王であると解釈すると、シェイクスピアはエリザベス女王のことをproud やdevilと呼んで批判していることになります。また、エリザベス女王は、月の女神である、ダイアナ、シンシア、ティターニアになぞらえられることを好みましたが、『ロミオとジュリエット』でロミオが“kill the envious moon”と言うのは、スコットランド女王メアリーの美しさを妬むエリザベス女王を批判していると考えられます。もし、こうした劇中の批判にエリザベス女王が気づいていたなら、シェイクスピアは絞首刑になっていたことでしょう。『リチャード2世』は、エセックス伯の反乱の前夜に再上演されましたが、エリザベス女王は自分が廃位されるリチャード2世王に譬えられたことに気づき、“I am Richard the Second” という言葉を残しました。

そして、ミルワード先生は「イングランド」、「ブリテン」、「ユナイテッド・キングダム」の違いを説明されました。エリザベス女王はウェールズのモンマス生まれのヘンリー7世を祖父に持つため、厳密にはウェールズ人でした。そのため、女王はイングランドよりブリテンという国名を好みました。「イングランド」という呼び名は、アングロ・サクソン族に由来するもので、「アングル人の国」という意味です。1485年、リチャード3世が死んで、ヘンリー7世のテューダー朝となり、イングランドとウェールズを合わせた「ブリテン」という名称が使われるようになりました。その後、スコットランド人のステュアート朝のジェームズ1世が王になり、アン女王の治世である1707年にイングランドとスコットランドが合併されました。さらに、1801年にアイルランドが加わり、「ユナイテッド・キングダム」となりました。こうして、イングランドの聖ジョージ、スコットランドの聖アンドリュー、アイルランドの聖パトリックの十字架が組み合わさって、現在のユニオン・ジャックが完成しました。第一次大戦後、カトリックのアイルランドは、プロテスタントの北アイルランドを残して独立しました。現在、イングランドでは、カトリック教徒とプロテスタント教徒が友好的な関係を保っています。

ここからミルワード先生の自伝的なお話に移ります。ミルワード先生のお父様はプロテスタントのイングランド人、お母様はカトリックのアイルランド人で、お二人は1922年にご結婚されました。先生のお父様の家系は厳格なプロテスタントで、二人の結婚は強く反対されたそうです。

その後ミルワード先生は、プロテスタントのC.S.ルイスと論争をすることになります。C.S.ルイスは、中世文学研究者であるにもかかわらず、カトリックへの偏見を抱き、聖母マリアへの言及をせずに、研究を行っていました。それに対して、ミルワード先生は、*Tablet*の紙上で反論を投げかけますが、オックスフォード大でC.S.ルイスの全講義に出席したり、文通をしたりと、友情を育みました。

こうして、ミルワード先生は、First FolioとAuthorized Versionについて、mild criticism（穏やかな批評）を行うという1時間の講義を終えられました。

さらに、シェイクスピアの全作品には隠れた「型」がある、と論じた最近の著書、*Pattern in Shakespeare’s Carpet*についてご紹介されましたが、「私の著作は日本でしか受け入れられない」と少し残念そうでした。

そして、1991年、92年の英文科生の詩集、*Flowers of Wisdom*をお見せになり、「この中の誰とも連絡がとれていない、誰か知っている人がいたら教えて欲しい」とおっしゃいました。

最後に記念撮影とお茶の時間です。ここで、「日本では写真となると、ロンドンと違ってキリ（霧）がない」とミルワード先生お得意の駄洒落がでました。

紅茶を飲みながら、先生は、参加者からの質問に答えてくださいました。

・シェイクスピアは、劇中でエリザベス女王を批判したとのことだが、どのように処罰を免れたのか？

「劇の形を借り、例えば『リア王』の狂人の姿で批判をした。そうすれば、単なる劇だと言い訳をすることができる。もし、エリザベス女王が怒ったなら、批判を認めたことになる。女王はシェイクスピア劇のファンで、とくにフォールスタッフのファンだったので、実際には罰を与えたくなかった。」

・隠れカトリックについて。

「シェイクスピアは隠れカトリックの多いウォリックシャー出身。田舎者でアウトサイダーだった。」

・妻のアン・ハサウェイに遺言書で2番目に良いベッドを与えたことについて。

「理由はわからない。8歳上の姉さん女房で、彼女から逃げ出してロンドンに行ったのかも。」

・シェイクスピア本人は実在するのか？

「フランシス・ベーコン、オックスフォード伯、エリザベス女王などの別人説もあるが、私はシェイクスピア本人説を信じる。」

そして、“Now is the hour when we must say good-bye, but not forever, just for today”とミルワード先生が歌を口ずさんで、英詩の会はお開きになりました。